

目次

1. ごあいさつ
2. CWAJ 70 周年記念行事のご報告
3. 新しい VVI Co-Chairs の紹介
4. インタビュー記事 5. 編集後記

※各項目の最初に★印をつけてありますので、★印で項目検索される方はご利用ください。

CWAJ = College Women's Association of Japan VVI = Volunteers for the Visually Impaired (視覚障がい者との交流の会)

★1. ごあいさつ

皆様、季節は春になりましたが、如何お過ごしでしょうか。年度の入替わる春は、卒業、入学の時期でもあり、新しい気持ちにさせられますよね。春号では、今年 CWAJ は創立 70 周年を迎えますが、その歴史をお伝えいたします。また VVI では新しい Co-Chairs が誕生しました。お二人からの挨拶と紹介記事をお届けしました。インタビュー記事では、郡司（ぐんじ）ななえさんをご紹介します、この Newsletter の編集者、古田（ふるた）とのインタビューを載せました。それでは、お楽しみください！

★2. CWAJ は今年、創立 70 周年を迎えます。VVI の活動を通して CWAJ をご存知の皆さまですが、この機会に CWAJ 奨学金委員会とアーカイブ担当の吉村啓子から、この会の 70 年の歴史をご紹介します。

「そこに必要性があるから」と手を差し伸べ、「まだ誰もやっていないこと」に敢えて取り組むパイオニア精神、これこそが CWAJ の活動の原点で、その 70 年の歩みは支援を通じた社会貢献の歴史とも言えます。

1949 年、戦後間もない日本で再会したマウント・ホリヨーク女子大の日米同窓生が、教育こそより良い社会、そして平和への道と考え、米国留学を志す日本の若者に渡航費用を援助しようと立ち上がったのが始まりでした。1972 年に奨学金制度に代わるまでの 22 年間に 400 名を超える若者が太平洋を渡り、日本の復興を支えるリーダーとなりました。教育への信念を引き継いだ奨学金は 1978 年には日本初の視覚障害学生奨学金を設立、さらに外国人留学生にも門戸を広げました。現在までの視覚障害学生奨学金の受給者総数は（海外留学奨学金を含む）72 名にのびります。

教育への信念とパイオニア精神はコミュニティの中でも発揮されています。国際交流・

異文化理解、そして世界共通語としての英語の重要性に気づいていた CWAJ は英語研修プログラムや英語教育の促進に尽力し、帰国児童の語学力保持クラスも 30 年以上続けました。

VVI (視覚障害者との交流の会) の前身である VBS は 1976 年に発足、「英会話の集い」などを通して社会のニーズに応えた生きた英語と異文化交流の機会を提供しています。「誰もやったことのないこと」への挑戦としては、点字での英語のソング・ブック作成や立体コピーと点字を組み合わせた「ぐりとぐら」の英語点字絵本などもあげられます。また、皆さんがよくご存知のハンズ・オン・アートは VI の方たちと一緒にアートを楽しみたいと、1996 年に始まりました。晴眼者が楽しむのと同じ版画展会場で開催するこのプログラムは初めての取り組みでもあり、当初はいろいろな苦労もありましたが、現在では版画作家の方たちや来場者にも広く認識されるようになり、バリアフリーなプログラムとして CWAJ 版画展の重要な一環となっています。1956 年に渡航費用捻出のために始まり、今年で 63 回目となるこの現代版画展は、日本で最大規模の公募展でもあり、大英博物館やワシントンの米国議会図書館をはじめ世界各地でも開催されて高い評価を受けています。

阪神淡路大震災や東日本大震災のような災害時においては、「そこに必要性があるから」手を差し伸べようと、奨学金を通しての教育支援や心のケアという「はこものでない」CWAJ らしいかたちで被災地を応援しています。

CWAJ の会員は 100% ボランティア。外国人も日本人も同じ目的のために一緒に働き、学び、友情を育んでいます。世界では紛争が絶えず、異なる意見・文化・宗教が排除される傾向にあるのは残念なことです。しかし、かつての「敵国」であっても、文化や宗教が異なる出身者であっても、寛容と柔軟な心をもってその違いを尊重しあえば平和な社会へとつながることを、CWAJ の活動は体現していると言えるのではないのでしょうか。CWAJ はこれからも世の中の動向にも目を向け、創立の精神を忘れずに活動を続けて行きたいと思います。

★3. VVI の新しい Co-Chairs、Silvia Wilson と Yoko Moskowitz の二人からの紹介記事です。

Silvia の文章は英語で、洋子 モスコウイツの文章は日本語です。英文は翻訳してありませんが、日本語の文章と兼ね合わせながら、判らない単語にはこだわらず、想像力を働かせて、読んでいただきたいと思います。それでは、仲の良いお二人の登場です。

My name is Silvia Wilson and I am very excited to serve as a co-chair for the Volunteers for the Visually Impaired Committee, with my wonderful co-chair, Yoko Moskowitz. I look forward to working with all the enthusiastic and dedicated volunteers who are bringing great English-speaking opportunities to

our visually impaired friends.

シルビアと一緒にお手伝いすることになった洋子モスクウイツです。アメリカ人の主人と結婚してからモスクウイツになりましたが、日本人には馴染みのない名前です。日本では洋子で通しています。

I am from the United States, but have lived in Tokyo for 18 months. I grew up in New York, Paris and London, went to university in Edinburgh, and finally settled in Minnesota, in the US, for 26 years to raise a family with my husband.

私は、日本生まれの日本育ちですが、日本とアメリカを行ったり来たりして、ロサンゼルス、ノースカロライナ、ミネソタに合計5年程おりました。アメリカに住み始めた頃は、英語がわからなくて泣きたい程でした。どうせ母国語のように話せないと思った瞬間、ブローケン英語でも平気になりました。結婚後、ワシントンDC近辺に住み始めて、13ページ年近くになります。その間、主人の仕事の関係でブルガリアに3年おりました。主人の退職と共に、2年半前から日本に住んでいます。

When we lived in Minnesota, I worked as the Director of Finance and Human Resources for a group of medical clinics. My responsibilities included budgeting, accounts payable, payroll, contracts, insurance negotiations and employee benefits. I enjoyed working with the doctors and administrators, as well as supporting our huge staff of nurses, lab staff and patient coordinators.

日本では、薬学部を卒業した後、医学部で、薬を副作用なくデリバリーする方法について研究をしておりました。研究の一方で、医学部の学生や看護学生に微生物学の講義や実習の指導もしていました。主人の仕事で移動が多かったため、結婚後はポータブルの仕事として医薬系の翻訳を始めて今に至っています。

I love being outdoors...my husband and I backpack and camp in remote regions of the United States and Canada. I enjoy cycling for fitness, and to run errands to the library, post office and grocery store. In the summer, when I am at home, I love walking my large dog on the beach or in the park near our home. I actively volunteer with Scouts, teaching them outdoor skills and

going hiking and camping with them. And I like to putter in the yard, planting or picking blackberries. And I love to read on my deck on a warm sunny day.

シルビア同様、私も主人も、アウトドアのアクティビティを楽しんでいます。主人は、サイクリングが大好きでアメリカでは良く一緒に出掛けていましたが、日本の道路は怖いので、サイクリングは遠慮しています。

Another one of my favorite pastimes is cooking and baking for friends and family, and hosting casual parties at our home. My mother is a fantastic cook, who took the time to teach me all her family recipes and to make the dinner table the center of the house. I have passed that love of food and family togetherness to our children and we often share recipe ideas. But all that eating and drinking gives me a reason to workout in the gym, or go for a long bike ride, or head to a yoga class.

私も、料理は大好きで、料理番組は飽きもせず見えています。アメリカでは、よく友人たちを呼んでガーデンパーティーをしていました。日本は、どこで食べても美味しいのでついつい、食べ過ぎてしまいます。シルビアのように運動すればよいのですが、運動不足を反省しているこの頃です。

My eldest daughter, age 30, lives in North Carolina with her husband and my elderly dog, Riley. She works for CISCO, and her husband is in the Army. This summer they plan to move to Alaska and start their own family.

私たちは、子供がいないので自由気ままに生活しています。二人とも音楽が大好きで、よくコンサートに行きます。音楽は本当に人生を豊かにしてくれます。20 時年程、ピアノを弾いていますが、ストレス解消に役立っています。

My son, age 28, lives in Colorado with his wife and their dog. He works for Ernst & Young in finance and is finishing his MBA at Denver University. His wife is finishing her PhD in Developmental Microbiology.

ピアノの他に、コーラスグループで歌っています。アメリカでは、ナショナルフィルハーモニーという 140 名ほどの合唱団に入っていました。年に 4 回のコンサートのた

めに、毎週、3時間近い厳しい練習がありましたが、フルハウスで歌う達成感がありました。また、ブルガリアにいる時には女性合唱団に入り、ブルガリア各地で歌う機会に恵まれました。

My younger daughter, also 28, lives in Minneapolis and is finishing her internship to become a registered dietician to work with athletes with eating disorders. She just raced in the Houston Marathon, and qualified to run in the US Olympic Trials for the marathon in 2020.

私がブルガリアにいる時に、有名なバイオリニストの五嶋みどりさんが演奏にいらっしやいました。コンサートホールでの演奏後、ブルガリアの視覚障害者の学校を訪問し、私も一緒させていただきました。その生徒さん達が、みどりさんの演奏に感動して涙していた姿は未だに忘れられない光景です。みどりさんのバイオリンの音色は、心に深く入り込んできます。機会があったら是非、聴いてみてください。きっと心洗われる気分になると思います。

My husband's job moved us to London a few years ago, and then Tokyo. We love exploring wherever we are living, and we would rather be outdoors than inside. In a few weeks we will be traveling to Cambodia and during Golden Week we will explore Hokkaido. We are in awe of the amazing opportunities we have.

主人は、以前に仕事で日本に10年近く住んでいましたので日本が大好きです。最初は2年の予定でしたが、あまりにも居心地がいいので、来年までいる予定です。私たちの活動に、何かご要望があればお気軽におっしゃってください。宜しく願います。

★4. インタビュー記事

今回紹介する郡司ななえさんは、27歳の時にベーチェット病で失明、日常生活訓練を受け、しばらくの間は白い杖で生活されていました。35歳になろうとしている年の春に、同じ白杖生活者の幸治さんと結婚され、子どもも生まれました。幼いころに犬に襲われて、それ以後犬は恐ろしくてたまらない存在でしたが、「眼の見えるような子育てのできるお母さんになりたい!」との、ななえさんの決心は「犬はこわい!」の感情を乗り越えさせました。盲導犬の訓練で、初めて出会ったのが最初のパートナーとなった

盲導犬のベルナ。それ以後 38 年間、ベルナ、ガーランド、ペリラ、ウランと生活を共にしてきて、今は 5 番目のしっぽのある娘、フローラと暮らしていらっしゃいます。その生活の日々を書き続けて 20 冊ほどの著作物を出されました。ここ数年は、『全日本盲導犬使用者の会』の会長として、盲導犬使用者の立場から社会へ発信することに努められました。

私生活では 48 歳の時に夫幸治（こうじ）さんを癌で亡くされ、一人で息子を育てて、65 歳から『私が私のために生きる』ということで年に 1 回、盲導犬と一緒に海外旅行に出かけられています。異国を楽しむという旅を重ねて 8 か国を盲導犬のウラン、次いで今は盲導犬のフローラとの旅を続けられています。「今が私の 70 代の青春のときなの」と笑うななえさんのこれからのことを話してもらいます。

--- CWAJ の 2 月 13 日の Luncheon に盲導犬フローラと一緒にななえさんをお招きして、隣の席の私、Newsletter Editor の古田と食事をしながら会話したことを記事にしました。食事の後は恒例により、Lecture を聴きました。Speaker は日本車椅子テニス協会（JWTA）佐々木瑞（ささきるい）さん 題名は「2020 を超えてすべての Para Sports を強化しましょう」でした。

ななえ：とても楽しいひとときをありがとうございます。それに、とても豪華なランチメニュー、近頃の私は日ごろの食事は本当に手抜き料理ばかり、全てとてもおいしくいただいております。私は『人生初めて食べた物語』を持っていますが、今回のクスクスですが、この年齢になって初めて食べた料理、とてもおいしかったです。だから『初めて食べた物語』のひとつとして心のメモに書き加えておきますね。

古田：「初めて食べた物語」とは何ですか？

ななえ：文字通り最初にそれを食べた、その物語です。

たとえばアイスクリームは私が 5 歳、幼稚園に通っているころに初めて食べました、チョコレートパフェは高校 1 年生の時に初めて食べました、その時の心模様も含めての風景スケッチです。

古田：最近ハスゴク忙しいと聞いておりますが、何がお忙しいのでしょうか？

ななえ：気持ちの切り替えに忙しいってことでしょうか、今回はやや元気のない私です。この 4 年間全てのエネルギーをかけて取り組んできました『全日本盲導犬使用者の会』の会長をこの春の任期切れで辞することにしました。それをお正月早々の 1 月 6 日の神戸での会で、執行部のみなさんに今期で辞めると伝えました。

古田：そんなにエネルギーをかけてやり遂げられたお仕事の内容とは、もう少し詳しくお話しいただけますか？

ななえ：私が会長を務めています『全日本盲導犬使用者の会』とは日本各地で盲導犬と生活している人たちだけで結成しています盲導犬の使用者団体です。この会は 26

年ほど続いていまして、全ての盲導犬使用者の3分の1ほどの人数が会員として登録しています。組織には本来目指さなければならない、そして発足時に掲げた理念があると思うのです。しかし長く会が続いてきますと、お互いが馴れ合い傾向になりその方向性がやや違ってきたり、目的がなんだったのかがやや不明瞭になったりしますね。私のこの2期4年間は、その屋台骨を修正する、軌道修正する、そういう役目がありました。もちろんこの状況で全てOKという人たちだけにいるのですから、その旗頭の私は、かなりのバッシングを受けました、しかし旗頭の私が揺れ動いてはなりません、そこだけは自分への戒めとして乗り切りました。常に是は是、非は非という態度は貫き通しました。いやはや大変な山を乗り越えたという気持ちですねー 笑み。

そして対外的にも、この間に盲導犬使用者が、バックしてきた2トントラックに巻き込まれて、盲導犬ともども使用者も事故死ということがありました。あるいは盲導犬使用者が駅のホームから転落死することも何件か起きました。それらはどこに原因があるのだろうか、もちろん社会機構の中でのハードな部分にも原因があったと思いますが、しかしそこに偶然ですが出会った人たちの心の問題、偶然に出会った人との関係、ソフトな部分にも重大な起因のひとつはあったと私は思います。それらを真剣に、情熱を傾けて、全力で取り組んできました。だから決着のめどは着けました、その反面心の切り替えをということで……、ある意味燃え尽き症候群みたいなものなのでしょうね。しかしですね、まだ数か月は任期中なのですが…… 笑い。だからボチボチ決着への手順を踏んでというところですね。

----この食事中、テーブルの下にいた盲導犬のフローラは、七重さんの隣に座っていた古田の膝の上に、ずっと顎を載せっぱなしでした。

古田：あの～！！フローラの顎が、私の膝に載っていますが、このままで大丈夫でしょうか？

ななえ：それは盲導犬としてとてもいけないことです、マナー違反です、ただちに叱らなければなりません 苦笑。今までの私の4頭の盲導犬たちと比べて、この子は断トツ甘えん坊の盲導犬です、世界中で、自分を嫌う人などいるわけもないと堅く信じているところがあるのです。雨降りの日にバスに乗りました、座席に座るときにフローラの口には注意していたのですが、その時は片手に彼女のリードとハーネス、そして片手にカサと体を拭うタオルを持っていましたので、フローラの口の位置を配慮することをつい怠ってしまいました。隣のおばさんの突然の「ギャー！」という叫び声です、車内は何事かと騒然となりました。原因はフローラがおばさんの膝に顎を乗つけたことで、おばさんは驚いてしまったのです、こういうことは盲導犬としてかなり問題行動ですし、使用者の私の注意力のなさであり、責任不行き届きです、平謝りに謝りました。決して前の犬たちと比較してはいけないと教えられてきましたので、これは内緒話ですが、や

はり盲導犬にも時代の変化は確実にありますねー。今から 38 年ほど前のベルナと生活していたころには、使用者の私も、盲導犬そのものも、そしてそれを取り囲む環境も、とてもピリピリしていましたし緊張感が常にありました。しかし盲導犬を取り巻く周りの人たちの眼もゆるやかになったと同時に、私たち使用者もパートナーの犬に対して甘くなってしまうのでしょね。今は盲導犬の『しつけ』が、周りの人たちから「虐待だー！」と批判されてしまいますし、これはとても難しい問題を含んでいます。

古田：今までお書きになられた本は文章が美しくて、展開が早くて、目に見えるようですよ。何か特別な工夫はあるのですか？

ななえ：文章を書くときは、その場面が私には見えているのです。ただその見えている、それをそのままに書くのですが。

古田：外国旅行にも盲導犬を連れていかれるのですよね。

ななえ：丁度 65 歳になって 4 番目の娘ウランと暮らす様になって、年に 1 回の外国旅行をするようになりました。平成 6 年に夫が亡くなって、それからの生活は全て私の肩にですからね。子育て、本を書き、盲導犬のお話の会も精力的に続けてきました。ただただがむしゃらに働いていましたが、私は本来、人と人が影響を与え合うという関係は好きでしたので、苦痛とも思わなかったですが、はっと気がついたら 65 歳になっていました。これからは自分のために時間とお金を使ってと思い立って、大好きだった旅を楽しむ、これを再開することにしました。さまざまな国の街を訪ねて、その空気を感じながら、そこに吹く風を感じながら、そこで暮らす人たちと触れ合う旅。特に海外への旅はお金があっても行けるわけではありませんし、時間があってもやはり行けるわけでもありませんね、そこにグッドタイミングが重ならなければということです。4 番目の娘ウランはこれぞ盲導犬といったタイプの子でした。それで、今こそが私のこのグッドタイミングなのではと思ったわけです。異国を楽しむという旅を重ねて 8 か国を盲導犬のウラン、次いで今は盲導犬のフローラとの旅を続けています。

古田：最初の外国はどちらでしたか？

ななえ：最初の年はツアーでイタリアに行きましたが、私はもともと絵葉書的な観光旅行は好きではありません、それに盲導犬と一緒に他の参加者のみなさんにご迷惑をおかけしてはいけないと、これがかなりなプレッシャーでしたね。それでもうツアー旅行はやめました、友達を探してと考えたのです。そうしたら近々ウィーンに留学するというバイオリンニストのお嬢さんと知り合いになりました。そこでウィーンを旅する間少しお世話になれないだろうかとお願いをして、快諾を得ての 2 年目、ウィーンへの旅となりました。3 年目の旅はブラジルで、ここは友人が日本人学校に勤務していて、『こちらにもななえさんのファンが居て、「盲導犬と一緒に学校へ来てくれないかなー！」と言っているよ』のメールが届きました、それで 24 時間の飛行時間を物ともせずウランと飛び立って行きました。4 番目の訪問国はスイスでしたねー、雄大な自然に涙が出るほど感動しました、ここは娘ほど年齢のちがう現役中学英語教師と仲良しになって、

彼女と一緒にしたので、ウランと何のこだわりもなく旅を、自然を満喫しました。5番目はカナダへ、6番目はニューヨーク、7番目はチェコのプラハを訪ねました、ここまでが盲導犬ウランと一緒にした。そして昨年2018年の夏私の5番目の娘になったフローラと一緒に南フランス、プロバンスを訪ねる旅をしました。

古田：旅行をされて、それぞれの国で、空気や音など、感じ方が異なることが多いでしょうね。

ななえ：そうですね、その国によって雰囲気はかなりちがいますよね、それは旅をしていてよくわかります。イタリアの街はにおいがきついですし、道路も意外なほど汚かったですね、残念ながらパリなども道路が汚くて驚きました。それに比べればオーストリア、カナダの人たちは自分の国の環境汚染にはかなり気配りがありましたね。アメリカは私はニューヨークだけを旅したのですが、常に優しい風がそよそよ吹いているかのように実にフランクに自分より弱い者、小さな者にすぐに手を貸してくださる、さすがアメリカは大きな国、気遣いのある国民性なんだと感心しました。

Q：オーストリアでの印象に深かったことは？

ななえ：私はその国の中であっちこっちと滞在地を代えての旅ではなくて、短期宿泊アパートメントハウスを借りての旅なのです、だからオーストリアではウィーンにだけ居たのですが、古い町並みで、その横の角からヒョイツとモーツアルトさんが、ベートーベンさんが、あるいはシューベルトさんが、出てくるのではと思うような雰囲気、とても歩いてもすてきでした。

古田：すごい感受性ですね。

ななえ：私は、モーツアルトは石川啄木のように、その作品性はすばらしいけれど人間的にはやや問題があるのではとずーっと感じてきました。しかしそのモーツアルトのかつて作曲活動をしていたという部屋の真ん中に立って、耳をすますと……、子どもたちの騒々しい声が、鶯鳥でしょうか「ガアガア」と鳴き声が、夫人のおしゃべりや笑いあう声が聞こえてきたのです。モーツアルトさんって以外に良い家庭人、お父さん、そして夫だったのではと思ったのです、単純でしょうか？！

そして展示されているその譜面、実にきれいなんですよ、書き加えられている部分もあまりないし、整然と音符記号が並んでいるということを説明されました。だから彼はこの騒然とした家庭の中であの曲を、この曲をと思いますと、実に天才なんだなーと実感しました。ベートーベンのピアノを秘蔵している女性が居て、その人は自分が気にいった訪問者にだけにしか、そのピアノを見せてはくれないということでしたので、「それなら行きましょう、きっと気にいってもらえますよ」と、ウィーンからゴトゴト電車に乗って郊外の町を訪ねて行きました。思ったとおりに私とウランはピアノの持ち主の夫人に気にいってもらえて、お部屋に通してくださっただけでなく、「ピアノに触れてもよいですよ」とも言ってもらえました。ソーッとベートーベンのピアノに触れさせていただきました、ベートーベンさんの情熱と気迫が指先から私の体内に流れてきて、

頭が一瞬クラクラしそうになるほど感動しました。それはアップライトピアノで、今のものより鍵盤の位置が低いように思えました。ベートーベンが教会の鐘の揺れる、しかしその鐘の音は自分の耳に微かでも聞こえない、それで自分の耳が完全に聞こえなくなったのだと悟ったという教会も訪ねて行きました。小さな教会でしたが、その日ガイドをしてくださっていたテノール歌手の人が「今日の記念に」と言われて、その教会の聖堂で交響曲第9の合唱の部分を独唱してくださって、それもこの旅の忘れられない思い出のひとつです。

古田：旅行をされて、日本に帰ってからは、何か日本の印象が変わりましたか？

ななえ：帰って来てから、街の中に点字ブロックがあふれるようにあることを再認識しました。

日本だけです、大きな交差点から小さな交差点までこんなにたくさんの点字ブロックが、それも確実に足裏に感じられるようにあるのは……。

古田：駅のホームにもいっぱいありますね。どうしてでしょうか。

ななえ：これは視覚障害者の自覚、自立をという意味なのですが、どうしてこうハードなものが充実して、ではソフトなもの、人間と人間との関わり合いは不必要なのかと、私は訪ねて行ったところの人たちとの触れ合いを思い出してとても寂しくなります。ニューヨークに行った時、電車が郊外へ向かって行きました、私たちは盲導犬の検疫書類に国の公印を押してもらうために電車に乗っていたのですが、突然座席に座っていた私、足元にダウンしていたウランを取り囲んで4人か5人の若者がハーとかクーとかの声を出しました。とっさになにか事件がかと身を堅くしていますと、突然その若者たちは歌い始めたのです、何の曲かはわかりませんでした、なんだか、まぶたがうるうるしてきました。こうして、身近に出会った外国からやって来た障がい者の私の旅を若者たちが精一杯の気持ちで祝福してくださっているのだと思ったのです、これぞアメリカという国なんだな—と思ったものです。日本もそんなふうに政治的にはいろいろある国際状況ですが、人間と人間とはもっと心温まる交流ができればよいな—と思っています。

ななえ：気軽に出发して行ける遠足を重ねて行って楽しい旅日記がとも思っていますし、年に1回海外を訪ねて行けるだけの体力を蓄えて、いつまでもいろいろな国を旅していきたいと願っています。

—しばらく佐々木さんの Lecture を聞く。

ななえ：今日の Luncheon の Lecture は「日本車椅子協会の佐々木さんの、今回の『やっでできないことはない！』のメッセージ、それに夢中になって情熱を傾けることへの憧れ、ファイトが徐々にでしたが私の体を熱くしました。もちろん栄養たっぷりのお食事の効果でのこともあると思いますが、本当に体全体がホカホカの暖かさですよ。やはり生きるって素晴らしいことですよ。

---Lecture の後の質疑の時間にななえさんから佐々木さんに「私は視覚障がい者ですが、車いすで白球が打ち返されてくるボールを眼で追いかけてながら車いすを動かしますね、そしてここがその位置だと決めたところで車いすを動かすことからラケットを振るところに行動を移動する、それは感覚的にどう気持ちを移動させるのですか？」という質問がありました。佐々木さんのお答えは「球が飛んでくるのを見てから動くのでは間に合いません。相手が球を受けるための動きから予想してというよりも、むしろ直感で体が動いている感じがします」ということでした。ななえさん、納得の表情でした。

---次の日、七重さんから古田にメールが届きました。

ななえさんのメールからの抜粋：わが家の玄関を入ったとたんに、ハーネスを外した瞬間にフローラはフーちゃんに変貌、家の中じゅう「ごはんだー、ごはんだよー！」とルンルン気分ではしりまわってくれました、私が無視をしていると、それに気がついたのでしょうか、その瞬間におりこうフーちゃんになって私の横にとてもきちんとした姿勢でよりそってきましたが・・・・・・、調子のよいやつめーってところですね。この私の「やるぞー！」のファイトがわがままいっぱい、勝手気ままなストレスをためない盲導犬フーちゃんにどう影響がありますか、次にお目にかかった時にわが娘フーちゃんが、どう変化していますか？ 私自身とても興味のあるところですが・・・

---皆様、明るくて生き活きとご活躍の七重さんの様子とフローラの様子が伝わったのでしょうか？ インタビューをした古田はななえさんの話に感激しっぱなし！！ ななえさん、フローラ、これからもお元気でね！！

★5. 編集後記

この Newsletter がお手元に届く頃は、改元ニュースで世の中が盛り上がっているころでしょうか。世の中も変わりますが、日々皆様も、CWAJ、VVI の私たちも、一步一步前を目指して、お互いに努力を重ねていくことでしょう。これからも、楽しい Newsletter をお届けしたいと思っておりますので、どうぞ応援をよろしく願いいたします。

Newsletter Editor 古田映子

CWAJ の HP は、下記のとおりです。Newsletter でお知らせする企画も詳しく載っておりますので、ご覧ください。 <http://www.cwaj.org/>

ニュースレターに関する皆さまのご感想、ご意見、ご要望なども、ぜひお聞かせください！

パソコンをご利用の方で、メールでのニュースレターの受け取りをご希望の方も、下記にご連絡下さい。

(連絡先) VolunteersVI@cwaj.org

Newsletter Editor (編集担当) : 古田映子 (ふるたえいこ) Distributer (発送担当) : 本村理子 (もとむらみちこ)